

研究・調査報告書

報告書番号	担当
332	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
<p>Alcohol and tabacco, and the risk of cancers of the upper aerodigestive tract in Latin America: a case-control study アルコール、タバコとラテンアメリカにおける気道消化管癌のリスク：ケースコントロール研究</p>	
執筆者	
Szymanska K, Hung RJ, Wunsch-Filho V, Eluf-Neto J, Curado MP, Koifman S, Matos E, Menezes A, Fernandez L, Daudt AW, Boffetta P, Brennan P	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Cancers Causes Control (2011) 22: 1037-1046.	
キーワード	
気道消化管、南アメリカ、タバコ、アルコール、癌	
要 旨	
<p>背景： 上部気道消化管 (UADT；口腔、咽頭、喉頭、食道を含む) の癌は世界中で高い発症率を有し、ラテンアメリカのある地域で特に頻度が多い。しかしながら、これらの地域での主要なリスクファクターの役割に関するデータはいまだに限られている。</p> <p>方法： ブラジル、アルゼンチン、キューバの7施設からの上部気道消化管扁平細胞癌の症例 2,252名とコントロール 1,707名に基づいて、飲酒と喫煙の役割を評価した。</p> <p>結果： 飲酒者は非飲酒者よりも 5 倍高い上部気道消化管癌のリスクを有するということが分かった。他のアルコールの種類に比べて食前酒や蒸留酒の非常に強い効果が観察され、食道ではオッズ比 12.76(信頼区間 5.37~30.32)に達した。タバコ喫煙者は非喫煙者よりも上部気道消化管癌に 6 倍なりやすく、現在喫煙者の下咽頭癌と喉頭癌のオッズ比は 11.14(信頼区間 7.72~16.08)に達した。すべての施設で、飲酒や喫煙をやめた後にリスクが減る傾向があった。アルコールとタバコの相互作用はそれらを掛け合わせた以上の数字になった。この研究では、すべての上部気道消化管癌症例の 65%に飲酒、喫煙を併せた影響が寄与していた。</p> <p>結論： このラテンアメリカにおける上部気道消化管癌に関する最大の研究で、初めて上部気道消化管癌症例の大多数は飲酒と喫煙を併せた影響によるもので、それら両方ともやめることで防ぎうるということが示された。</p>	